

例は見当らない（成虫越冬にしてはどれも鮮かな個体ばかりであった）。このような成虫出現期は始めてのように思われる。

コデマリ（小手毬）の花に集るコジマヒゲ  
ナガコバネカミキリ  
（兵庫県甲虫相資料・136）

高橋 寿郎

コジマヒゲナガコバネカミキリ *Glaphyra kojimai* (Matsumura, 1939) (小島圭三博士が横浜本牧で採集された1♀で *Epania kojimai* として記載された。Ins. Mats., Vol. 13, No. 2/3, P. 56, 1939) は兵庫県下では広く分布し、個体数も割合多く採集されているようである。

たゞし神戸市内からの記録は今迄見当らなかった。最近身近の所に多くいる種であることがわかったので、此処に報告しておきたい。

神戸市兵庫区鶴越筋夢野大師福寿院のそばに公園として休息場が設けられていて巾1m、長さ20m位にわたってコデマリ (*Spiraea cantoniensis* Lour.) が植えられている（海拔約198m）。この開花期4月末から5月初めには無数のツヤケシハナカミキリが集ってくる（勿論他にもポビューラな仲間も多く集ってくる）。ツヤケシハナカミキリの方は♀の色彩変化に名付けられている異常型と言うのも結構見られる。大変活潑に飛びまわっている。これに反しコジマヒゲナガコバネカミキリはコデマリの花の中にもぐり込んだりとまっているが、動作は大変のんびりしていて手でさわってもゆっくり手の平に落ちて余り逃げようとしめない。花粉を身体につけているものが多い（ツヤケシハナカミキリの方はとまっている所へ手をのばすと素早く飛び去ったり下へ落ちたりする）。

かなり多くのこのコジマヒゲナガコバネカミキリがコデマリの花に来ているわけで1983年5月3日から5月12日までに14♂37♀が採集出来た。案外身近の所を注意すると普通に見られる種なのかもしれない。5月3日～5日頃が最盛期のように5月12日に見られたのが最終だった。尤も調べた時間帯が午前9～10時の1時間づつであるから午後になると状況も違ってくるかもしれない。それと案外と♂の方が♀に比して飛来している個体が少ないように思われる。

カエデ、サンショウ、ウシコロシなどの花上とかミズキの枯木で得られるとか、幼虫はミズキ、キブシ、モミにいたると言われている（草間，1972）。林・小島両博士によるとソヨゴの枯枝に6月頃産卵され、幼虫は10～11月に老熟し、11月下旬に蛹になって越冬、翌年4月中旬羽化しばらく材中にて孔道を通って外に出ると（1974）。

末文になって申し訳ないが、このコジマヒゲナガコバネカミキリは林 匡夫 博士に同定して頂いた。厚く御礼申しあげる。同時に学名も同博士の御教示で従来の *Molorchus* 属でなく *Glaphyra* 属とした。

## クビジロカミキリ神戸市内に産す (兵庫県甲虫相資料・137)

高 橋 寿 郎

クビジロカミキリ *Xylariopsis* (*Xylariopsis*) *mimica* Bates, 1884 (模式標本, 中禅寺, 札幌) は日本全国 (屋久島もふくむ), 朝鮮, 中支那, 満州とに分布しているが, 必ずしも多く産する種では無さそうである (青森県から初記録としてエゾエノキの根元の枯葉の下から越冬中のものが採集出来たと, 佐藤, 1983)。

兵庫県下からは従来宍粟郡の赤西が知られているのみで県下産としては珍しい種のようなのである。1983年5月8日神戸市内烏原貯水池畔で長い網で樹木の枝先を拘って1♀が入ってきた。樹種は確認出来なかった。温帯林帯のツルウメモドキに集まり, 幼虫はこれを食べると言われている。一応記録として報告しておき度い。はっきりした色彩をしているので同定の間違いは無いと考えられる (最近赤西のツルウメモドキから得たこの種の蛹を黒田祐一氏は図説しておられる, 1983)。

## 兵庫県下でのイガラシカッコウの分布 (兵庫県甲虫相資料・138)

高 橋 寿 郎

イガラシカッコウ *Tillus igarashii* Kōno, 1930 は北海道定山溪で採集された1♀ (3-Y-1928, K. Igarashi leg.) に基いて河野広道博士が図をつけて記載されたものである (*Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. Vol. XI, pt. 3, P.134~135, Fig.1, 1930*)。種名には採集者名が用いられている。

その後カッコウムシ科を研究しておられた伊賀正汎氏が鳥取県大山産で原色図説をされた (1955)。その時稀な種で燈火に飛来することがあるとされ, 大阪府能勢, 九州英彦山の産も記録しておられる。